

国際日本 研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWSLETTER
ニューズレター
東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
2017.10 No. 21

- 夏季セミナー・大学院生サマースクール 2017 報告「言語・文学・社会—国際日本研究の試み—」
the Summer Seminar and PhD Students Summer School 2017 'Language, Culture, Society: Constructive approach to International Japanese Studies'..... P1
- Metroethnicity (メトロエスニシティ) への視座 Language Revival: A Viewpoint on Metroethnicity P2
- 「1611 年 - 1616 年 ロンドンから 日本に送られてきた望遠鏡と、絵画と版画の船荷—その目的と意味について考える」
'A telescope and a Cargo of Paintings and Prints Sent from London to Japan in 1611-1616- Their Purpose and Meaning'..... P4
- 活動報告 (2017 年 4 月～9 月) Activity Report (Apr.-Sep.2017) P5

夏季セミナー・大学院生サマースクール 2017 報告 「言語・文学・社会—国際日本研究の試み—」



2017 年 7 月 12 日 (水) から 14 日 (金) までの 3 日間、夏季セミナー 2017「言語・文学・社会—国際日本研究の試み」が開催されました。国際日本研究センターが主催するこの夏季セミナーは今年で 6 回目を迎え、国内外から多くの参加者が集いました。

夏季セミナーでは、海外の諸大学で日本語研究、日本の文化・社会研究を牽引する第一線の講師 10 名と国際日本研究センターが受入れた博報財団の研究者 1 名 (モンゴル) を迎え、国際日本研究センターの講師陣とともに、充実した講義が行われました。



さらに、サマースクール研究発表会も同時開催されました。日本で学ぶ大学院生 29 名、タマサート大学 (タイ)・シンガポール国立大学 (シンガポール)・韓国外国語大学校 (韓国)・中央大学校 (韓国)・北京大学 (中国)・北京外国語大学 (中

国)・東海大学 (台湾)・国立台湾大学 (台湾)・国立政治大学 (台湾) の 14 名及び、開南大学 (台湾) から 1 名の大学院生が参加しました。国内からは本学の大学院生のほか、筑波大学の大学院生も研究発表を行いました。この報告者 44 名にのぼるワークショップも今年で 5 回目を迎えました。今年は司会、タイムキーパーともに学生による自主運営の形式を取りましたがこれも成功し、報告後は例年より活発な質疑応答がなされました。



その後の大学院生の懇親会には 80 名ほどが参加し、会場のあちこちで人の輪が出来、今後、国際日本研究を担っていく若手研究者同士が親しく交流しました。また、海外の講師を囲み、熱心な議論と歓談の場も持たれました。

セミナーの延べ参加者数は 14 コマで約 500 名、4 会場で行われた大学院生によるサマースクール研究発表会の参加者も延べ約 700 名を超え、その数は年々増加しています。最終日にはサマースクール修了式も執り行われ、海外から参加した大学院生に修了書が手渡されました。ギャラリーでの記念撮影の後、大学院生たちはそれぞれの場での研鑽と再会を誓い、名残を惜しみつつ帰国の途につきました。



(友常勉)

From Wednesday the 12th of July until Friday the 14th of July, the 2017 International Center for Japanese Studies (ICJS) Summer Seminar, 'Language, Culture, Society: Ventures in International Japanese Research,' was held. This year's seminar marks the sixth time it has been held, and attracted many participants from both Japan and overseas. This seminar was delivered by 10 professors from overseas researching at the forefront of their fields (Japanese language research, and Japanese culture/society research), one guest researcher (from Mongolia) of the ICJS invited by the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship program, and a group of professors from the ICJS, resulting in a fulfilling series of lectures.

In addition, the Summer School Research Presentation, run mostly by postgraduate students, was held at the same time. On top of the 29 postgraduate students studying at Japanese universities, 15 students from Thammasat University (Thailand), The National University of Singapore (Singapore), Hankuk University of Foreign Studies (South Korea), Chung-Ang University (South Korea), Peking University (China), Beijing Foreign Studies University (China), Tunghai University (Taiwan), National Taiwan University (Taiwan), National Chengchi University (Taiwan), and Kainan University (Taiwan), also participated. As for students from Japanese universities, apart from TUFS students, presentations were also given by postgraduate students from the University of Tsukuba. 44 students participated in this presentation, marking the fifth year it has been held. This year's hosting and timekeeping relied on self-management by the students, but was a great success, and resulted in more lively question and answer sessions following each presentation.

After the day's events, party for graduate students was held and attended by around 80 people. Students could be seen forming small groups of participants, and getting to know the young researchers who will become the future of the international Japanese research field. The students also had lively debates and discussions with the professors visiting from overseas.

The final total of participants in the seminar was around 500 people (over 14 time blocks), and the total of participants in the Summer School Research Presentation was around 700, proving that the number of participants is growing every year. On the final day, a finishing ceremony was held for the summer school course, and certificates were given to the graduate students that came to participate from overseas. After taking a commemorative photograph at the Galleria, the students vowed to devote themselves to their studies, to one day reunite with the students they met at this seminar, and then reluctantly parted ways. (Tsutomu TOMOTSUNE)

言語の復権：Metroethnicity（メトロエスニシティ）への視座 Language Revival: A Viewpoint on Metroethnicity

科学研究費基盤研究C（代表：谷口龍子）主催、言語文化学部、国際日本研究センター・対照日本語部門、比較日本文化部門共催により、東京外国語大学の萩尾生教授と、国際基督教大学のジョン・C・マーハ教授による講演会が開かれた。

I 「バスク語の存続、教育から対外普及へ」—萩尾生教授

1. バスク地方と言語



バスク地方はスペインとフランスにまたがる地域であり、全部で7領域に分かれている。スペイン領側にアラバ県、ビスカイア県、ギプスコア県の3つのバスク自治州とナバーラ自治州の計4つの領域、フランス領

側にラブルディ地方、低ナバーラ地方、スベロア地方の3領域がある。住民の約6割がバスク自治州に住み、彼らにとって自身のアイデンティティはスペイン人よりもバスク人であるという意識の方が強い。それは、彼らが自身のことをエウスカルドゥナク（＝バスク語の話し手）と呼ぶことから見て取れる。

バスク地方で話されている言語はバスク語とカスティーリャ語の2つである。そのうち、バスク語は系統不明の孤立言語であり、少数言語にありがちな方言分化が著しい。また、歴史的に見ても、スペイン領とフランス領に分かれているバスク地方は、両政府から言語アイデンティティを抑圧されることがあった。さらに、20世紀に入りフランコ政権になると、文献に明確な記述はないものの、バスク語はさらに弾圧を受けるようになった。このような状況により、バスク語を話す人口はさらに減ったが、1960年代前半にバスク語教育運動が起こる。これは、バスク語によるバスク語話者の育成や識字教育を目指すもので、初等教育・中等教育で教えるための学校であるイカストラや成人教育のためのバスク語塾の設立にもつながった。そして、1968年にはバスク語アカデミーが設立される。これにより、統一バスク語ができた。統一バスク語は、バスク地方での標準語とされ、教育、行政、メディアで現在も主に使用されている。

これらの動向を踏まえて、バスク語が法的認知されるようになったのは1970年代から1980年代後半にかけてのことである。スペインでは、1978年憲法第3条により、カスティーリャ語が国家公用語であると定められたが、同時に他言語も自治州内の公用語となる可能性が明記されている。また、地域によってバスク語の社会的地位は異なる。バスク自治州では全域でスペイン語とバスク語のどちらも公用語である。1982年に使用正常化基本法が制定され、州全域で二言語主義を取るようになったのである。ここから、バスク自治州では積極的な言語政策が取られていると言える。ナバーラ自治州では州の一部で公用語とされ、1986年にバスク語特別法が制定された。州を3つの言語圏に分けて、現状追認の言語政策を取っている。

このように、スペイン領では憲法による規定を受け、バスク語による言語アイデンティティの復権が目指されているものの、フランスではいかなる公用語の地位も得ていない。

2. バスク語の対外普及へ

2007年に設立されたエチェパレバスクインスティチュートは、バスク語の対外普及を目的とし、バスク地方の現代的な文化や音楽と共にバスクアイデンティティの保護、普及活動を行っている。エチェパレとは現存する最古のバスク語出版物である『バスク初文集』の著者名に由来している。この『バスク初文集』内の「コントラパス（＝歩合わせ）」という詩はバスク語を称揚する詩として評価され、1974年にはシャビエル・レテによる楽曲化がされ、バスク地方の民衆に受け入れられた。さらに、バスク語アカデミーによる各国語への翻訳、出版がされ、多くの人々にその活動が高く評価された。エチェパレバスクインスティチュートはハイカルチャー志向、コスモポリタン志向であり、より現代的なアート、音楽、文化の対外普及に取り組んでいる。

そして、もう一つバスク語の普及を主として活動している組織がHABEである。HABEは1981年に設立され、バスク自治州内での成人に対するバスク語教育を行っている。さらに2003年以降は在外同胞への教育に特化している。ここで注目したいのが、言語の普及における“内”と“外”が存在するという点である。先述したエチェパレバスクインスティチュートは民族性、領域性どちらをとっても“外”である外国人に向けての普及を目指しているが、HABEは民族性では“内”、領域性では“外”である在外同胞に向けた教育活動であるということだ。そのように、目的と対象によって活動する組織とその役割は大きく異なる。

では、言語を対外普及するのはなぜか。それには4つ理由が挙げられる。1つ目に、言語文化の保護である。言語の専門家を養成し、その言語の話者数を増加させ、その質を保証することで言語文化の保護、伝承が達成されるからである。2つ目に、社会的な理由がある。在外同胞との絆を強くし、移民の社会的統合を促進したり、対外イメージを好転させたり、その言語の持つ価値観の普及をさせたりすることで社会的な言語地位を向上させることができるのである。そしてその影響が3つ目の政治的、外交的な理由につながる。言語の社会的な価値を高めることにより、国家や地域の国際関係における優位な立場を構築することができる。そして、最後に経済的な理由が挙げられる。言語や文化産業による経済的利潤の獲得はさらなる言語、文化普及のリソースとなり、国家存続のための重要な役割を担うのである。

フロアからは、バスク人にとってバスク語とは何か。という質問が挙がった。それに対し、自らのことをエウスカルドゥナク、すなわちバスク語の話し手と呼ぶことからわかるように、バスク7領域ではバスク人であることはバスク語を話すことという認識が高いが、全体をみて、バスク地方に住んでいる人、あるいは住みたい人というのもバスク人としてのアイデンティティを持つだろう、という回答が得られた。さらに、バスク語

は肯定的な価値としての言語である、と教授は述べた。

肯定的な価値としての言語とは、その言語を話す人々のアイデンティティが言語によって付与され、価値づけられ、認められるということだ。バスク語はバスク語を話す人々によって称揚され、保護され、使用が禁止された時代を乗り越えて今もなお存続している。このような言語の復権活動はその他にも多くあるが、日本人にとっての身近な例として、アイヌ語がある。アイヌ語は北海道、樺太、千島列島に居住していたアイヌ民族の言語であるが、現在は極めて深刻な消滅の危機に瀕した言語であるとユネスコに認定されており、アイヌ語の話者は極めて少ない。しかし、1980年代以降、アイヌ語を残そうとするアイヌ民族自身らの運動によりアイヌ語保存への動きが起こった。そして現在ではSTVラジオ（札幌テレビラジオ放送）でアイヌ語ラジオ講座が放送されるなどしており、アイヌ語を保護しようとする活動が続けられている。また、アイヌ語を授業に取り入れている小学校もある（注）。言語という知的財産を保護し、伝承していくことは、その言語を話す人々のアイデンティティを守ることと同義であり、言語と自己同一性は切り離せないものだ。バスク語の復権運動とその成功は、他の少数言語を話す人々に大きな希望を与えたのではないだろうか。少数言語であるバスク言語が社会的な地位を取り戻し、さらに対外普及まで活動の幅を広げていることは称揚されるにふさわしいものだ。

ただ、若い世代にとっては、バスク語を知っていることが必ずしもバスク人という民族アイデンティティを保障するとは限らないのではないだろうか。同じように、アイヌ語を知っていることがアイヌ人という民族性を常に証明するわけではないだろう。

この考察について、続くジョン C. マーハ教授の講演が興味深く関連していた。



II 「ヨーロッパにおけるケルト語の再生」—ジョン C. マーハ教授

19世紀、コーニッシュ（ケルト語）は死語であるとされたが、1992年のEuropean Charter for Regional/Minority Languagesの制定により、EUによってコーニッシュ語を含むケルト諸語のステータスは上がった。それは、ケルト諸地域で行われているケルト諸語復権の動きがあるからである。たとえば、スコットランドではスコットランドゲール語が標識や授業のコースにおいて広く使われたり、アイリッシュ語がEUの公式使用言語として認知されたりしている。また、マン島ではマン島語を学ぶことができる学校も設立され、教育や行政のさまざまな面から少数言語が肯定的に価値づけられている。

このような運動が起こった背景にはいくつかの要因がある、とマーハ教授は述べた。その中の一つに移民の働きを挙げている。移民はコミュニティに同化するとき、その地域に受け入れられるためにその地域の伝統的な言語を学ぶことがある。それ

は、おそらく言語は最も接触性が高く、そして地域になじむために最も近道な方法であるからではないだろうか。それはさておき、移民がその地域の伝統的な言語を習得することによって、その地域の少数言語は少なからず良い影響を与える。なぜなら、話者を獲得することで言語の復権が見込めるからだ。すなわち、移民という、領域性では内、民族性では外である存在が、流入した先のコミュニティの言語を話すことによってコミュニティに溶け込んでいくことにより、図らずも言語の復活を助けることになるのである。

しかし、移民はそのケルト語を知っているからといってケルト民族に所属するわけではない。アイルランド政府は「市民権とは民族で想定されるものではなく、言語と文化による」(2015)としている。ここで、マーハ教授の考えるメトロエスニシティという新たな概念が出てくる。

メトロエスニシティとは、さまざまな民族的背景を持つ人々がさまざまな文化を自己に取り入れ、多文化を受容しながら生活するというハイブリットなアイデンティティである。メトロエスニシティは、アイデンティティを全く新しい観点から捉えた見方だ。この考え方を当てはめれば、ケルトの諸社会においてケルト語を知り、学ぶことはエスニシティを証明することではなく、ケルト語に「かっこいい」「洗練されている」という印象を持ち、それを習得することは「クールさ」を示すサインであるということだ。

移民にとってもそれは当てはまるだろう。新しいコミュニティの言語、ここではケルト諸語を学ぶことはバイリンガリズムであり、「クールさ」の象徴であり、そしてコミュニティへの同化を図るための手段の一つである。そこに民族性や民族的なアイデンティティを求めるという考えは変わってきているのではないか、というのがマーハ氏の意見であった。

マーハ氏のメトロエスニシティという概念は、バスク語を話し、バスク語を学ぶ人びとにも当てはめることができるのではないだろうか。もちろん、バスク語の復活により自らのバスク人としてのアイデンティティを形成する人もいだろう。しかし、それはバスク語を学び、話す、すべてのバスク地方に住む人々に当てはまることなのだろうか。情報化社会の現代では、人々は他言語に接触する機会が増え、言語は常に多くの人々の前にさらされている状況である。その中で伝統的な少数言語を学ぼうとする人々のうち、一体どれくらいの割合が「クールさ」や「洗練性」を求める美的感覚を感じてその言語を取り入れようとしているのだろうか。（工藤綾乃（本学学生）、谷口龍子）

注 2016年12月20日付、日本経済新聞 Web 刊より
http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG09HDA_6A221C1CR0000/
 (アクセス日 2017年1月24日)



1. The Basque region and language

The Basque Country lies across Spain and France. 60% of residents live in the Basque Autonomous Community and identify more strongly as Basque than Spanish. This is evident from the way they describe themselves as euskaldunak (Basque speakers). The two languages spoken in the Basque country are Basque and Castilian. Basque is a language isolate whose origin is unknown and has a striking dialectal culture common in minority languages. Historically,

the area's linguistic identity was repressed by Spanish and French authorities. Basque came under further suppression in the 20th century from the Franco government, although there are no clear historical records. Under these conditions, the number of Basque speakers fell, but in the early 1960s a movement for Basque education emerged. This aimed for the fostering and literacy education of Basque speakers using the Basque language. It also led to the establishment of ikastola (primary and secondary schools) and adult language schools teaching Basque. In 1968 the Basque Language Academy was established, creating the standard Basque regarded as the standard language in the Basque country and used widely in education, government and media.

2. Promulgation of Basque Abroad

The Etxepare Basque Institute founded in 2007 preserves and spreads Basque identity, its modern culture and music, in the aim of promulgating Basque abroad. HABE is another organization involved in the promulgation of Basque. Founded in 1981, it conducts Basque language education for adults in the Basque autonomous area.

Professor Hagio explained the four reasons for spreading Basque abroad. First is the preservation and transmission of language and culture by training specialists and increasing the number and quality of speakers. Second is the raising of Basque's social position by strengthening bonds with the diaspora, promoting immigrants' social integration and improving the language's outward image. This leads to the third, political and diplomatic reason. Increasing the language's social value can build it a favorable position in national and international affairs. Fourth, the economic gain from language and culture leads to the spread of the language and its resources, playing an important role for the continuation of a state.

The success of the Basque revival movement surely gave hope to speakers of other minority languages. Basque's recovery of its social standing and its international expansion activities deserve praise. However, for younger generations, knowing Basque does not necessarily preserve their ethnic identity as being Basque.

• The Revival of Celtic Languages in Europe – Professor C. Maher

In the 19th century, Cornish (a Celtic language) was considered a dead language, but the 1992 European Charter for Regional/Minority Languages raised the status of it and other Celtic languages. This was due to revival activities in the various Celtic areas. Minority languages are valued in education, government and elsewhere. In Scotland, Scottish Gaelic is used widely on signs and in lessons, Irish is recognized as an official EU language, and some schools on the Isle of Man teach Manx.

Immigration is one of the contributing factors. Immigrants may learn a region's traditional language to assimilate into the community. This is probably because language is the shortest and most accessible way to adapt to the area. Immigrants learning of a traditional regional language has a considerable positive effect on such minority languages, increasing speakers which can lead to language revival. Immigrants, physically inside but ethnically outside a community, can unwittingly aid language revival efforts by learning a language to fit in.

However, immigrants do not join the Celtic ethnic group by speaking a Celtic language. The Irish government (2015) grants citizenship based on language and culture, not ethnicity. Here appears Professor Maher's new concept of metroethnicity.

Metroethnicity is a novel approach to identity: a hybrid identity whereby people with various ethnic backgrounds receive and integrate into themselves different cultures. Thus, learning a Celtic language in a Celtic society does not demonstrate ethnicity, but shows one's "cool" or "polished" impression of it and one's "Celt-ness" by learning it.

The same is true for immigrants. Learning the language of one's new community is a "cool" bilingualism and also one way of measuring assimilation into a community. Professor Maher believes the idea of seeking identity from one's ethnicity or ethnic identity is changing.

This concept of metroethnicity can be applied to those speaking and learning Basque. Of course, some have developed their own Basque identity as a result of Basque's revival, but does this apply to everyone learning and speaking Basque in the region? In a modern information society, where chances for language contact are increasing and many people are constantly exposed to languages, what proportion of those learning minority languages do so out of an aesthetic desire for a "cool" or "refined" language?

(Ayano KUDO, Ryuko TANIGUCHI)

<講演会> 「1611年 - 1616年 ロンドンから日本に送られてきた 望遠鏡と、絵画と版画の船荷—その目的と意味について考える」 「A telescope and a Cargo of Paintings and Prints Sent from London to Japan in 1611-1616— Their Purpose and Meaning」

2017年6月27日(火) 18:00～20:00

東京外国語大学 研究講義棟 226 室

講演：タイモン・スクリーチ氏 (ロンドン大学 SOAS・美術史)

コメンテーター：久米順子氏 (本学総合国際学研究院)



タイモン・スクリーチ氏は政治経済のコンテクストから芸術を読み解くという方法論を実践してきた。日本内外を問わず近世日本美術史研究をけん引してきた一人である。この講演会でもその方法論がいかに発揮された。東インド会社は最初の日本に向けた船を1611年に送った。それはイギリスでは「Emperor」と呼ばれる支配者——ここでは徳川家康

を意味した——にあてたプレゼントを携えていた。豪華に飾られた望遠鏡である。これはヨーロッパを離れた最初の望遠鏡であり、またはじめて国王級の貴賓への贈答品として作成されたものであった。家康は1613年にこの望遠鏡を駿府城で受け取った。史料は失われているが、なぜこのような贈答品が送られ、こうした計画が発案されたのか。カトリック・イエズス会の東アジア覇権に対抗するプロテスタント教会の野望がここには伏在している。そしてまた同時に、イギリス東アジア会社が計画していた「三角貿易」——ロンドンとバンテン（ジャワ）のあいだでの香辛料をもとめた銀の交易。しかしイギリスにとっての唯一で実際的な輸出品としての綿織物であり、イギリスは寒

冷地の国を探していた。しかもそれは銀の供給者である必要があった。そしてこの要望に完全に合致していたのが日本であった。こうした宗教的政治的、そして経済的な要請のなかで、徳川家康に望遠鏡と版画作品が贈呈されたのである。



講演に対する久米順子氏のコメントは、スペイン絵画研究の現在の動向を紹介することで、「プロテスタントの覇権にもとづく世界美術史の書き換え」というスクリーチ氏の展望を、これ

また手堅い美術史研究に引き戻すものであった。この芸術史研究のバトルは、今後ほかの場所に転戦しておこなわれていくだろう。折り目正しい講演と議論のやりとりであったが、そこにあったのは熱い応酬であった。50名の参加者のなかには、久能山東照宮の宮司の落合偉洲氏の姿もあり（フロアーからの補足説明もなされた）、スクリーチ氏の研究と人脈の広がり的一端がうかがえるものであった。

(友常勉)



The East India Company first sent a ship to Japan in 1611. Onboard was a present for the ruler known in Britain as “emperor”, i.e. Tokugawa Ieyasu. It was a luxuriously decorated telescope, the first to leave Europe and the first to be produced as a gift for someone of royal stature. Ieyasu received the telescope at Sunpu castle. Why was such a gift sent, and such a project proposed? Japan fit perfectly with the ambitions of the Protestant church against the Catholic and Jesuit hegemony in East Asia, and the “triangular trade” planned by the (British) East India Company. The telescope was sent together with prints to Ieyasu amid such religious, political and economic imperatives.
(Tsutomu TOMOTSUNE)

2017 年活動報告（2017 年 4 月～ 9 月）Activity Reort (Apr. ～ Sep.2017)

■研究会・ワークショップ■

● 2017 年 4 月 7 日（金）国際日本語教育部門主催
文法・語用と教育シリーズ第 6 回研究会
森本 一樹氏（リーズ大学東アジア学部准教授）
ローレンス・ニューベリー・ペイトン（東京外国語大学博士後期課程）

● 2017 年 6 月 17 日（土）国際日本語教育部門主催
「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第一回研究会
望月 圭子、申 亜敏（東京外国語大学）
張 正（東京外国語大学 博士後期課程）
範 航宇（東京外国語大学 博士前期課程）
劉 倩卿（東京外国語大学 博士前期課程）
崔 正熙（東京外国語大学 博士後期課程）
ファム・ティ・タイン・タオ（東京外国語大学 博士前期課程）
クリコフ・アガタ（東京外国語大学 博士後期課程）
ローレンス・ニューベリー・ペイトン（東京外国語大学 博士後期課程）
片山 晴一（東京外国語大学 博士後期課程）
小柳 昇（東京外国語大学）

● 2017 年 6 月 27 日（火）比較日本文化部門主催
大学院国際日本学研究院（CAAS ユニット）共催
「1611 年 - 1616 年 ロンドンから日本に送られてきた望遠鏡と、絵画と版画の船荷——その目的と意味について考える」
Timon SCREECH（タイモン・スクリーチ）教授
（ロンドン大 SOAS・美術史）
久米順子 准教授（東京外国語大学）

● 2017 年 7 月 12 日（水）- 14 日（金）国際日本研究センター主催
夏季セミナー 2017「言語・文学・社会」—国際日本研究の試み—
講師：徐 一平氏（北京外国語大学）中国
趙 華敏氏（北京大学）中国
范 淑文氏（国立台湾大学）台湾
蘇 文郎氏（国立政治大学）台湾
蕭 幸君氏（東海大学）台湾
金 鍾德氏（韓国外国語大学校）韓国
尹 鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学校）韓国
李 吉鎔氏（中央大学校）韓国
スコット・ヒスロップ氏（シンガポール国立大学）シンガポール
タサニー・メーターピスィット氏（タマサート大学）タイ
ダワー・オユンゲレル氏（モンゴル国立大学）モンゴル
春名 展生、野平 宗弘、久野 量一（東京外国語大学）日本
※同時開催「サマースクール院生研究発表会」
2017 年 7 月 12 日（水） 15:15-18:25
2017 年 7 月 13 日（木） 15:15-17:55

■ Lectures and Workshops ■

● Fri. 7 Apr. 2017 : "Grammar, Pragmatics and Education Series"
The 6th Workshop hosted by the International Japanese Education Division, International Center for Japanese Studies
MORIMOTO Kazuki (Associate Professor, University of Leeds)
Lawrence Newbery-Payton (Graduate Students, TUFS)

● Sat. 17 Jun. 2017 : the 1st Seminar hosted by International Japanese Education Division, ICJS
「Japanese Compound Verbs and Japanese Education: Comparative Analysis From the View of Different Languages (Chinese, Korean, Vietnamese, Polish, English)」
Keiko Mochizuki (Professor, TUFS)、YaMing SHEN(Project Researcher, ICJS)
Zheng ZHANG (Graduate Students, TUFS)
HangYu FAN (Graduate Students, TUFS)
QianQing LIU (Graduate Students, TUFS)
Junghee CHOI (Graduate Students, TUFS)
PHAM THI THANH THAO (Graduate Students, TUFS)
Agata KUILIKOW (Graduate Students, TUFS)
Lawrence Newbery-Payton (Graduate Students, TUFS)
Seiichi KATAYAMA (Graduate Students, TUFS)
Noboru OYANAGI (Project Researcher, ICJS)

● Tue. 27 Jun. 2017 : Seminar hosted by Comparative Japanese Culture Division of ICJS
Co-hosted by Institute of Japan Studies (CAAS Unit)
「A telescope and a Cargo of Paintings and Prints Sent from London to Japan in 1611-1616- Their Purpose and Meaning」
Timon SCREECH(Professor, University of London, SOAS)
Junko KUME (Associate Professor, TUFS)

● Wed.-Fri., 12-14 Jul. 2017
Summer Seminar 2017 "Language, Literature, Society : Constructive Approach to International Japanese Studies"
XU Yi Ping (Beijing Foreign Studies University)
ZHAO Hua Min (Peking University)
FAN Shu Wen (Taiwan University)
SOO Wen Lang (National Chengchi University)
HSIAO Hsing Chun (Tunghai University)
KIM Jongduck (Hankuk University of Foreign Studies)
YOUN Hosook (Cyber Hankuk University of Foreign Studies)
LEE Kilyong (Chung-Ang University)
Scot HISLOP (National University of Singapore)
Tasaneeth METHAPISIT (Thammasat University)
Oyungerel DAVAA (National University of Mongolia)
Nobuo HARUNA, Munehiro NOHIRA, Ryoichi KUNO (Tokyo University of Foreign Studies(TUFS))
※ Associated event Summer School 2017
"Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies"
15:15- 18:25 Wed. 12 Jul., 2017
15:15- 17:55 Thu. 13 Jul., 2017

● 2017 年 7 月 16 日 (日) 国際日本語教育部門共催
国際ワークショップ「外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ICT」2017
内堀 繁利氏 (長野県上田高等学校校長)
Howard Hao-Jan Chen (陳浩然) (National Taiwan Normal University)
Masashi NEGISHI (東京外国語大学)
草間 千枝氏 (長野県上田高等学校教諭)
福井 克実氏 (長野県上田高等学校教諭)
Shin'ichiro Ishikawa (石川 慎一郎) (神戸大学)
望月 圭子・申 亜敏・小柳 昇・鄧海芹・張 正・ローレンス・ニュー
ベリーペイトン (東京外国語大学)
游 韋倫・川野 友里恵 (リンガハウス教育研究所)
武重 真優子 (東京外国語大学院生)
星 秀雄氏 (株式会社レアジョブ)
赤堀 侃司氏 (東京工業大学名誉教授・日本教育情報化振興会会長)
趙 華敏氏 (北京大学)
于 康氏 (関西学院大学)
砂岡 和子氏 (早稲田大学名誉教授)
小林 幸江 (東京外国語大学名誉教授)

● 2017 年 9 月 23 日 (土) 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 22 回研究会
「「は」「が」と判断 — ドイツ語学と日本語学の接点 —」
藤縄 康弘氏 (東京外国語大学：ドイツ語学、理論言語学)
田中 慎氏 (千葉大学：ドイツ語学、言語学)
尾上 圭介氏 (東京大学名誉教授：日本語文法論)

■今後の予定■

● 2017 年 12 月 9 日 (土) 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 23 回研究会
定延 利之氏 (京都大学)
● 2018 年 2 月 17 日 (土) 国際シンポジウム
ロシア、ウクライナ、ポーランドの先生方
● 2018 年 3 月 3 日 (土) 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 24 回研究会
井上 逸兵氏 (慶応義塾大学)

● Sun.16Jul. 2017 Reform in Foreign Language Teaching :
International Cooperation/ High School — University Cooperation/ ICT
Shigetoshi UCHIBORI (Principal, Nagano Prefectural Ueda Senior High School)
Howard Hao-Jan CHEN (Professor, National Taiwan Normal University)
Masashi NEGISHI (Professor, Tufs)
Chie KUSAMA (Teacher, Nagano Prefectural Ueda Senior High School)
Katsumi FUKUI (Teacher, Nagano Prefectural Ueda Senior High School)
Shin'ichiro Ishikawa (Professor, Kobe University)
Keiko MOCHIZUKI, YaMing SHEN・Noboru OYANAGI・HaiTing
WU・Zheng ZHANG・Lawrence Newbery-Payton (Tufs)
WeiLun YOU・Yurie KAWANO (Lingua House Institute for Education)
Mayuko TAKESHIGE (Graduate Student, Tufs)
Hideo HOSHI (RareJob)
Kanji AKABORI (Emeritus Professor, Tokyo Institute of
Technology・President, JAPEC&CEC)
HuaMin ZHAO (Peking University)
Kang YU (Professor, Kwansei Gakuin University)
Kazuko SUNAOKA (Emeritus Professor, Waseda University)
Yukie KOBAYASHI (Emeritus Professor, Tufs)

● Sat. 23 Sep. 2017 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"
The 22th Research Seminar hosted by Comparative Language Division
Yasuhiro FUJINAWA (Associate Professor, Tufs)
Shin TANAKA (Professor, Chiba University)
Keisuke ONOE (Emeritus Professor, University of Tokyo)

■ Future Events ■

● Sat. 9 Dec. 2017 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"
The 23th Research Seminar hosted by Comparative Language Division
Toshiyuki SADANOBU (Professor, Kyoto University)
● Sat. 17 Feb. 2018 International Symposium
Hosted by ICJS : Researchers from Russia, Ukraine, Poland
● Sat. 3 Mar. 2018 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"
The 24th Research Seminar hosted by Comparative Language Division
Ippei INOUE (Keio University)

■お知らせ■

国際日本研究センターのホームページをリニューアルしました。
旧サイトへ接続されても新しいホームページにつながります。



<日本語サイト> <http://www.tufs.ac.jp/icjs/>



<英語サイト> <http://www.tufs.ac.jp/icjs/en/index.html>

『日本をたどりなおす 29 の方法』を増刷しました。

